

## 名古屋納屋橋から広げる名古屋のまちづくりに関する考察

NPO法人ゴンドラと堀川水辺を守る会 正会員 兼松 健治

### 1. はじめに

納屋橋は、名古屋の中心を流れる堀川に架かる橋で、名古屋を代表する橋の一つである。NPO法人ゴンドラと堀川水辺を守る会では、堀川再生を目的にヴェネチアで作られたゴンドラを納屋橋の下をくぐるルートで2006年から定期運航を行っており(図1)、船上では納屋橋を背に写真を撮ることが人気である。しかし、現代の名古屋が堀川を活かしきれているとは言い難い。筆者が運航を通して経験したこと等から名古屋のまちづくりを考察する。



図1 納屋橋とゴンドラ

### 2. 名古屋納屋橋とその境界の概要

納屋橋が架かる堀川は、名古屋城の築城にあわせ、その城下町に熱田湊(名古屋港)から物資を運ぶために造られた運河である。その際、堀川には七つの橋(五条橋、中橋、伝馬橋、納屋橋、日置橋、古渡橋、尾頭橋)が架けられ、その一つが納屋橋であった。納屋橋境界の賑わいは、明治になり名古屋にも鉄道が通ることとなり、名古屋駅へ続く道の整備で、納屋橋と前後の道路が拡幅され、名古屋の主要な通りの一つとなると増し、昭和には劇場やダンスホールなどが建ち並び非常に賑やかとなった。人々が橋と境界を愛していたのは、現在の納屋橋が鋼桁橋であるものの、橋の両サイド及び欄干にアーチ橋時代の部材が再利用されていることが示す。

### 3. 堀川及び納屋橋境界の水辺空間

江戸時代の堀川及びそこに架かる橋の様子は当時の絵図に見ることができ、日置橋の花見は特に有名な情景で、名古屋名所団扇絵「堀川花盛」にその賑わいを見ることが出来る。また、橋の袂などに設けられた物揚場は、水運に無くてはならない施設であった。しかし、名古屋の発展と共に堀川の水質が悪化し又水運が衰退すると人と建物は堀川に背を向け、汚水と雨水を流すだけが堀川の役割となった。その後、堀川が国のマイタウン・マイリバー整備事業に1988年に最初の河川として認定されて以降、再び賑わいを取り戻すべく河川改修とあわせた水辺空間の整備と、水質改善のための諸施策が行われた。特に、納屋橋境界に整備された遊歩道(河川敷地)でテラス席の設置が可能となったことは、それまでのどぶ川で臭い川のイメージを変える一歩となり、名古屋の水辺空間という役割を再び持たせることとなった。ロケ地として、様々な撮影がされている。

### 4. ヴェネチアンゴンドラの運航

運航しているゴンドラは、長く名古屋港ポートビルに展示されていたもので、納屋橋栈橋の発着で月2回の定期運航を真夏と冬の休止期間以外で行っている。運航コースは、感潮河川である堀川の流れや風の状況によるが、約15分で納屋橋とその上流の錦橋の下をくぐるもので、船上では、スタッフが乗船客にゴンドラの概要はもちろん、堀川の歴史や水質及び納屋橋のことなど興味にあわせた様々な情報を提供している。

### 5. ゴンドラ運航で得られた声

乗船客との会話では、次の様な意見を多く受ける。いずれもまちづくりにヒントを与えるものである。

- ・堀川は臭いと思っていたが、これなら楽しめる。名古屋でこんな優雅で贅沢な経験ができるとは。
- ・堀川が名古屋城までつながっているなら、ゴンドラで名古屋城まで行きたい。風が気持ちよい。
- ・川から見る街の景色は違う。橋をこんなにしっかりと見たのは初めてで、裏に写る光の反射がきれい。

### 6. ゴンドラ乗船客数の分析

運航は、最大15便/日であるが、運航日によりばらつく乗船客数の要因を検討する。過去6年間の運航日で、

キーワード 名古屋堀川、納屋橋、ゴンドラ、水辺、まちづくり、観光  
連絡先 NPO法人ゴンドラと堀川水辺を守る会 <http://horikawa-gondola.com/>

他のイベント開催と重なり、その相乗効果で高稼働率であった日を除き、乗船客数の不快指数、潮位及び観光地の客数との関係有無を調べた。なお、当日の気象及び潮位は気象庁 HP を、市内観光地の当該月の客数は名古屋市の名古屋市観光客・宿泊客動向調査の結果を利用した。結果は、いずれとも強い関係があるとは言い難いもので、ゴンドラの集客力が限定的で外的要因の影響を受けておらず、納屋橋界隈が観光地と言えない現況が理由と考えられる。

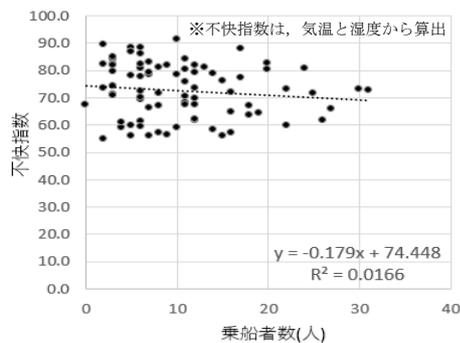


図2 乗船者数と不快指数の関係

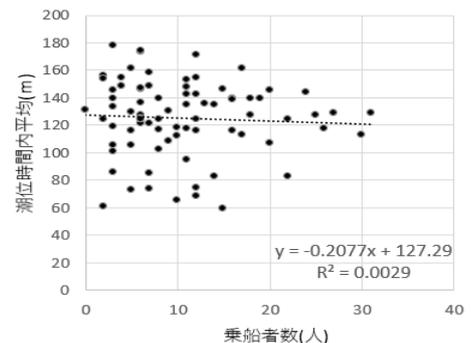


図3 乗船者数と潮位の関係

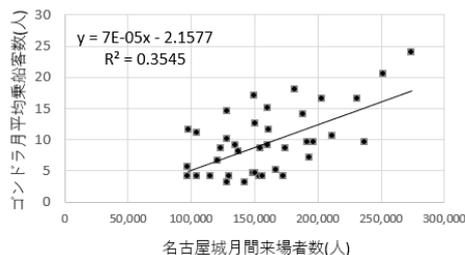


図4 名古屋城とゴンドラの関係

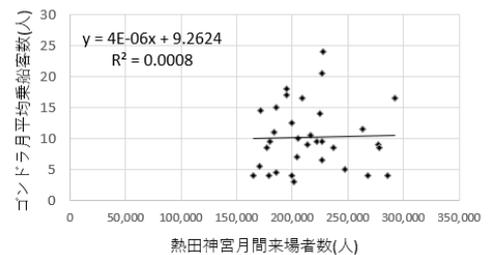


図5 熱田神宮とゴンドラの関係

## 7. 納屋橋界隈のまちづくり

名古屋の水辺空間としては発展途上であるが、近年、再開発ビルのオープンやホテルの新規開業で、納屋橋界隈の住人や来訪者は増加している。そして、堀川では様々なイベントが開催され、まちに潤いを与えている。2007年から開催される堀川フラワーフェスティバルは市民手作りのフラワーハンギングバスケットが錦橋～納屋橋間を中心に街を彩り、堀川花盛の賑わいを現代に蘇らせている。そして、その期間中はゴンドラが花見舟として錦橋袂の仮棧橋から発着する(図6)。仮棧橋が錦橋袂にあることで通行人が足を止め、橋の上と下で交流が生まれている。これは、橋が川を通過させるだけの役割から街と川の交点として、水辺空間に人々をアクセスさせていると言える。納屋橋を中心としたまちづくりは、遊歩道による回遊性に加え水面との繋がりをハードとソフトの面で演出し、川の横断方向から川方向に人の流れを引き入れ、水辺と水面で魅了することが、名古屋の魅力としての確立に繋がるだろう。

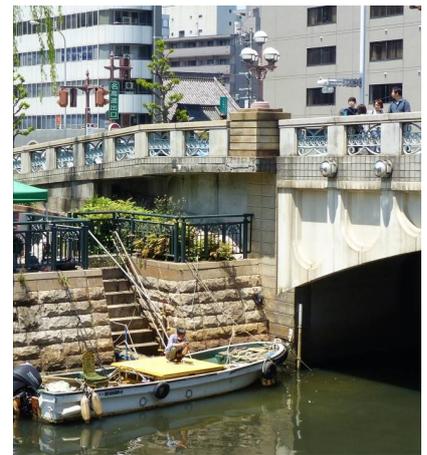


図6 錦橋(右)と仮棧橋(左下)

## 8. 名古屋のまちづくり

ゴンドラに乗ると川方向のつながりを感じ、上流にある名古屋城に船で行きたくなる方がいることは、納屋橋界隈だけでなく名古屋にとっても魅力向上につながる可能性を示しており、堀川には水の道であった歴史と橋の下という非日常空間が広がり、定期船の運航及び巾下門界隈の整備により名古屋城観光に向かう有力な手段となり得ると考えられる。社会的に観光地と現状で捉えられていない堀川で、船で行くお城観光を誰が形づくるかが課題であるが、川が南北を繋ぐものであることは400年以上前から変わらない。また、橋の袂の物揚場はその役割を終えると下水のポンプ場が置かれたところもあるが、今は消滅したか、役割なく痕跡だけを残している。五条橋袂で物揚場跡が公園に整備されたが、同様に他でも水辺に近づける又は水面に出られる整備がされ、堀川とまちが至る所で結びつければ、名古屋は堀川を活かした魅力的なまちづくりができるだろう。

## 9. おわりに

ゴンドラに乗っていると橋や遊歩道から手を振ってもらえ、大きな声で挨拶を交わしている。納屋橋におけるゴンドラの運航は、水辺に賑わいをもたらしており、運航が名古屋の未来につながることを期待している。また、筆者は、まちの魅力や豊かさの向上に寄与できるよう引き続きゴンドラ及び堀川に取り組んでいく。

**参考文献** 伊藤正博・沢井鈴一、堀川 歴史と文化の探索、(株)あるむ、2014